次郎柿

獣医学科4年　吉田綾子

毎年、この時期になると次郎柿と冬柿が店に並ぶ。私は柿が好きでよく買うのだが、特に次郎柿は自分の幼い時よく目にしていた情景を思い出させる。そのため、懐かしくていろいろある中でどうしても次郎柿の方に手が伸びてしまう。

子供の頃、住んでいた家の庭に、次郎柿の木があった。いつも思い出す風景がある。夕方、西日が庭と柿の木を真っ赤に染めて、私は柿の下に作ったインコの墓を見ている。目印に立てた板は朽ちて曲がり、墓の周りには雑草が生えている。すぐ近くに住む１つ年上の友達がバイオリンの練習をしているのが聞こえ、柿の木のずっと奥に目をやると小さく駿河湾が見えている。柿の木には葉だけが茂っていた。

毎年柿の実がなるのを楽しみにしていたが、１０年間その家に住んでいて、実がなったのは引っ越す前の２年間だけだった。「桃栗三年柿八年」と言うが、本当にそうだった、と家族でよく話している。その実の数も10個もならなかった。その分とても大事に食べたのを覚えている。

今はその家に新しい家族が住んでいる。きっとたくさん実がなって、毎年、秋の楽しみになっているのだろう。